希
のぞみ

希　02

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14756984

ヒュンマ

ダイ大　ヒュンマ小説です。twitter/miya_haniwa555
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ前提でお話が進んでいます。
◇マァム視点　◆ヒュンケル視点　この02はヒュンケル視点です。
PixivさまのTwitterリンクは十二国の驍泰アカにルーラしますので、ご注意ください。

希　02

　◆

　夜の道を、二人で歩く。
　手は繋いでいるが会話があるでもなく、ただひたすら歩く。正直に言えばなにを話せばいいのかがわからない。
　変に緊張をしてしまっている。
「……あ、あの、ヒュンケル？」
　無言に耐えかねたのか、マァムが声を掛けてくる。
「どうした？」
「急に城を出ることになってしまって、よかったの？」
　自分を慮る声音に苦笑を浮かべそうになり、堪える。きっと苦笑をすれば迷惑を掛けていると勝手に解釈をしてしまうだろう。

　マァムは、素直なだけあり、相手の裏を読むのが下手だ。
　一緒に居ただけでその相手と相思相愛だと曲解をするくらいに。
　己自身に対する苦笑であろうと、彼女が誤解をする言動はわかる限りは控えるべきだろう。
「かまわんさ。オレの居場所は、今はおまえの隣だ……そうだろう？」
　普段ならかまわないと言うだけで止めるところだが、先程ド突かれながら、チウに助言をされたのだ。

　＊　＊　＊

「マァムさんは真っ直ぐ過ぎて、お前みたいな捻くれ者の考えなどわかりゃしない。だから、ヒュンケルが真っ直ぐに伝えるしかない

んだぞ！！　ぼくの代わりにマァムさんを守る役をするんだから、心まで守れ！　いいか！！」
　ビシッ！と指を指すチウ。その姿に目を瞠る。
　クロコダインが後ろで微苦笑を浮かべていた。
　オレも、クロコダインも、チウも、彼女の真っ直ぐな光に助けられた。クロコダインはダイという太陽の影響のが強いが。
　だから、彼女を傍で見続けていたチウの言葉には従う以外は浮かばなかった。
「わかったよ、先輩」
　そう冗談めかせば、クロコダインは大きな声で笑い、チウは下から睨みつけてきた。チウには、正直に言えば申し訳ない気持ちが沸く。だが、それを言葉にするのは彼を侮辱することだろうし、こんなふうにアドバイスをしてくれる彼を貶めたいとは思わない。
「感謝する」
　気持ちを込めてそう言えば、「後輩は先輩の言うことを聞くものだからな！」と無理をしてそう大笑いをしていた。

　＊　＊　＊

　今のオレの居場所は、マァムの隣。
　オレのその言葉に、マァムは顔を真っ赤にさせて両頬を抑えてそっぽを向いてしまう。可愛らしいが、顔が見られないのは淋しいし、手を離されたのはもっと淋しい。
　ヒュンケルはその頬の手を外させて彼女の右手を握る。
　そして手を繋いでそのまま歩き出す。
　細くたおやかで小さな手。
　最終決戦まで戦い抜いた少女戦士。
　――――城で守られていて欲しかった。
　だが、行けるのであれば一人でも多くダイの踏み台が必要な状況

だった。
　ほんの刹那でも敵を怯ませられれば、ダイの生きる目が生まれるかもしれない。そのための参戦。
　彼女に関しては心無い者が、足手纏い、最弱と罵るが……彼女がいなければ、オレ達がまとまって立ち向かうこと自体がなかったかもしれない。
　心の片隅に、自分たちよりも弱く小さく力ないマァムが毅然と立ち向かっている……そんな彼女に、逃げる情けない背中は見せられないという思いがあっただろう。
　唯（ただ）いるだけで勝利へ導く女神のように、一種の崇拝にも似た感情がメンバー内に浮かんでいたのは誰も否定できないはずだ。
　本当に足手纏いであれば、誰かがそれを告げていた。
　彼女の戦闘力よりも、心根が必要だったのだ。
「ごめんね……ヒュンケル」
　ゆっくり彼女の歩幅に合わせて歩きながら、しょんぼりとするマァムの様子に自然と笑みが浮かぶ。
「なにがだ？」
　彼女の本心を聞き出そうと促せば、彼女はまた表面を見ていることがわかる。
「物慣れていなくて……今まで、そういう話題から逃げていたから、いざ好きな人と一緒にいる時にどうすればいいのかわからないの」
　顔を真っ赤にさせてえぐえぐと今にも泣きだしそうな風情に、笑いしか零れない。さらりと盛り込まれた『好きな人』という単語にオレが有頂天になっていることなど、彼女はきっと気付かない。
「可愛いな」
「へ？」
　瞳を真ん丸にして見上げてくる姿も愛らしい。
「……そうだ、ちょっと寄り道になるが、見せたいものがある」
　手を引いて道を逸れる。
　道案内の看板には湖の名前が書かれていた。苦々しいが、レオナ姫の指示だ。

湖の淵まで進み、景色を眺める。
　それ程大きい湖ではないが、森の中の湖のため上空の視界が開け満天の星が湖面に映り反射している。満天の星と鏡合わせの湖面が風で揺られて煌めきが踊っているように見える。
「綺麗……」
　マァムが頬を染めて眼前の景色に見入る。
　ネイル村という小さな村から飛び出して、ずっと戦い続けていた彼女。こんなふうに景色をのんびりと眺めることなどなかっただろう。
　―――それは、オレも同じだが。
　ヒュンケルは景色を少しだけ眺め、目を横の存在に戻す。
　見入るというのは、魅入ると似ている。
　眼前の景色とはいえ、自分ではないものに彼女が夢中なのはそれだけで腹立たしい。不意に浮かんだどうしようもない嫉妬に心を操られ、ヒュンケルは彼女の手をきゅっと握り、顔を近付ける。
「マァム」
　耳元で名前を呼び、顔を上げた彼女の唇に己の唇を重ねる。
　ちゅ、という軽い音をさせて離れる。
　きっと、彼女にとっては初めてのくちづけ。
「……！」
　少しの間を置いて、彼女の顔面が真っ赤に染まる。
　それを心地よく眺めながら、少女の体を腕の中に収める。
　景色が見れなくなるだろうが、今はオレを感じて欲しい。
　腕の中に仕舞い込んで、頭や肩や背中をやさしく撫で続ければ、彼女の腕がオレの体を包む。
　胸に頬を寄せて息を吐き出す彼女に、愛しさばかりが募る。
　最初から……オレにとっての女性は腕の中の存在のみ。それは共に旅をしていたクロコダインやラーハルトには筒抜けで、彼らに口止めをするのは無性に恥ずかしかった。彼らには番（つがい）から手を離す感覚がわからないらしい。何度か話題に上っては理解出来

ないと呆れられたものだ。
　あたたかでやわらかだが、武闘家としての筋肉が綺麗に乗っている身体。
　このぬくもりも愛しさも、放置していた過去の自分に殴り掛かりたくなる。
　だが、そんなことはできるはずもない。
「マァム」
　もう一度名前を呼んで、見上げてくる彼女に深いくちづけを仕掛ける。
　先程と同じように軽く重ねてから、もう一度重ね、唇を食む。上唇、下唇と食みながら、舌で唇をなぞる。しつこくなぞるように舐めていれば、口を開けろという要求とわかっただろうマァムがそっと唇を開けた。
　舌を差し込めば、彼女の体が揺れる。
　怯える舌を捕らえて吸い上げる。
　ただ、あまり性急に進み過ぎてはいけない。
　きっとどれもこれも初体験の彼女に合わせ、己の欲望を制御するしかない。
　もう一度軽く唇を合わせてから口を離せばマァムは肩を揺らして呼吸を荒くしていた。まさか……呼吸を忘れていた？
「はっ……はぅ……こ、呼吸って、どう、すればいいの？」
　顔が熟れた林檎のように真っ赤だ。
　可愛い。
　あまりの可愛さに、身悶えて倒れて医者や回復呪文の世話になりそうな気分だ。
「唇が離れた時や斜めになった時に……かな」
　言ってもわからないだろう。ご要望ではないかもしれないが、さっそく実践する。
「……んっ、ぅぅん、はぁ……」
「ああ、上手だ」
　はふはふと呼吸をする彼女の様子を見ながら、くちづけを繰り返す。
　夜の湖、煌めく星々、そんな中で景色も見ずにくちづけ合うオレ

達。
「ヒュンケル……も、ぅ、だめ」
　ずるりとマァムの体が崩れる。
　それを慌てて抱き留めて、さすがにやり過ぎたかと……幾らか、反省をした。

「ヒュンケル、ごめんなさい！」
　湖を望む場所にある大木の元、マァムを膝に抱えてオレは座り込んでいる。腰が抜けた彼女は先程から謝ってばかりだ。
「いや、オレが調子に乗り過ぎた」
　だが、謝るつもりはないので謝罪はしない。
　彼女は顔を両手で覆っている。表情は見えないが耳まで真っ赤になっているのでまだ恥ずかしいのだろう。
　そんな彼女を腕の中に仕舞い込んで、背を撫でる。
「それだけ、オレを男として意識してくれているということだろう。嬉しいから気にするな。それに可愛い」
　先輩の助言に従い、素直な気持ちを告げれば、指の隙間からビックリ眼が覗いていた。
「か、かわっ？」
　ああ、本当に可愛い。
「とりあえず……そろそろ出発できそうか？」
　頭を撫でながら尋ねれば、彼女から小さく「意地悪」という言葉をもらった。

　◆

パプニカを滅ぼしたオレが、パプニカで剣を教える。その矛盾に姫も気付いているだろうに、彼女はオレの存在を忌避するどころか、元敵だった者たちを活用し続けた。
「人がいないんだもの、動ける人が動くのが当然よ」
　にこやかな笑顔でこき使ってきやがる、とラーハルトが笑っている。ダイが見つかり、体制が整いつつある昨今。
　平和になれば現れる、口だけの勢力が力を増しつつあった。
　彼らが真っ先に目を付けるのがオレ。
　異形の姿の者よりも人の姿をしたオレへは文句が言いやすいらしい。だから、それを利用する。
　クロコダインやラーハルトへその目が向かないように、まずはオレが矢面に立たなくてはと……動いていた。
　そんなある日、レオナ姫に執務室まで呼び出される。

「マァムがね、故郷へ帰るんですって」
　軽く言われたが、彼女の目には恨みにも似た炎が宿っていた。
　何を返せばいいのかわからず、黙っていればレオナが椅子から立ち上がる。
「私も悪かったから……お節介を焼くんだけど」
　そう言い置いてから、彼女は唇を噛み締める。
「マァムは、ポップと未来を歩くつもりはないそうよ」
「……なに？」
　聞き捨てならない言葉に目を見開く。
「あと、あなたは、エイミと幸せになればいいんですって！」
　叫び、睨んでくる。
　その瞳の強さにたじろぐ。
「……意気地なし」
　唇を再び噛み、見上げてくる妹弟子。
　悔しさか憤りで口を開けないレオナに代わって、ダイが口を開く。
「ヒュンケル……マァムを泣かせないでよ」

弟弟子がレオナの肩を抱いて、見つめてくる。この二年で伸びた身長。そろそろ追い抜かれるかもしれない。
　ダイは真っ直ぐにヒュンケルを見つめる。
「故郷に帰って、気持ちにケリをつけるって……きっと、マァムのことだから覚悟を決めたら、神に身を捧げる神官みたいに自分のことなんて放って、一生正義に身を捧げちゃうよ」
　ダイの言葉に息を呑む。
　慈愛の聖母、天使と祀り上げてきたのに、いざ本当に女性としての幸せをマァムが蔑ろにしそうだと指摘されて身が竦む。
　あの……マァムが愛する人と生きることも、我が子を抱くこともなく、正義に身を捧げる。
　人々に敬愛される聖なる乙女のような生き方……似合っているが、彼女には人によっては平凡と言われる幸福こそが相応しい。
　敬われ跪かれ、正義の愛をあまねく人々に与える姿。
　―――そんなマァムを見守りたかった訳じゃない。
「気が付いて、いるんでしょう？」
　レオナの言葉に目を見開く。
　……なんとなく……もしかしたらと思う時はあった。自惚れではないかと自問自答したものだが……
「ポップ君以外の、見知らぬ男にマァムを任せられるの？　それでいいの？　自分の手で幸せにしたいって思わないの？　思ってよ！！」
　レオナの叫びに、ダイが彼女の背中を撫でる。
　涙が零れ落ちる。
「私の友達、大事にして」
　レオナはそう言うとダイの胸に抱き付いて泣き出してしまった。そんなレオナを腕の中に仕舞って、ダイは大事に大事に無言で慰める。
　暫くして、ダイが口を開く。
「ヒュンケル……マァムは今日の夜に発つって」
「ダイ……」
「オレさ……ヒュンケルとマァムの子供と、オレ達の子供とポップの子供が仲良くなったら面白いって思うんだ」

「……子供」
　突飛な話に目を丸める。
「心の中のお父さんに聞いてみて……ヒュンケルが幸福になることを、望んでいるんじゃないかな」
　年下なのに、自分よりもよっぽど成熟した考えを持つダイにヒュンケルは何も言い返せない。
　頭に浮かんだ幸せな光景。
　ふっくらとした赤ちゃんを抱いて幸福そうに笑うマァム。腕の中の子は銀の髪。赤子を渡されて戸惑うオレ……
　浮かべてしまえば……抗える訳がない。
　欲しい。
　とてつもなく欲しい。
　激しい渇望。
　その光景を手にしたいという強い思いが、湧き上がる。
「……レオナ姫、ダイ。年上のオレが一番不甲斐ないな」
「ヒュンケル……」
「ありがとう、二人とも。しばらく出仕できないが……よろしく頼む」
　ヒュンケルの言葉に、レオナとダイは安堵の笑顔を見せてくれた。

　◆

「もう、大丈夫……たぶん」
　情けない言葉尻に笑みが零れる。
　ポップ以外の、見知らぬ男にマァムを任せられる訳がない。自分の手で幸福にしたい。
「このまま、街まで抱いていってもいいぞ」
　本気でそう言えば、腕の中の愛しい人は、「自分で歩けるから！」と慌てていた。可愛い。

きっと再び会った時に、マァムからいろいろレオナは聞き出すだろう。その時に彼女の指示通りに『ロマンティックなファーストキス』を為し得たことを聞いて、にんまりと笑うに違いない。
　あまり良い気分はしないが、お節介な妹がいて幸いだと感じるしかない。

　助言がなければ失っていた存在。
　不甲斐ないオレで良いと言ってくれる、オレの天使を……オレは飽きずに見つめ続けた。

おしまい